

# スポーツ界の大きな変化の入り口

## — パリ2024オリンピック・パラリンピック競技大会

野口 亜弥

パリ2024オリンピック・パラリンピック競技大会(以下、パリ大会)は、ジェンダー平等の観点で歴史的な大会として注目されています。その理由は、初めて女子選手の大会参加が50%を達成する大会だからです(前回大会は48.8%)。この達成は、1896年にギリシャのアテネで開催された第1回近代オリンピックで女性が出場できなかった歴史を考えると、約128年の歳月をかけてようやく印をつけることができたジェンダー平等達成のための通過点でしょう。

パリ大会では、ジェンダーとユースを大会テーマとして重要視していくことが当初から掲げられ、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会(以下、東京大会)と比較して、ジェンダーミックスの競技会が18種目から22種目が増えていきます。競技参加者の割合が完全にジェンダー平等に達している競技は28競技から32競技に増えました。ユースをテーマにした取組ではサーフィン、スポーツクライミング、スケートボード、ブレイキングダンスの4種目が新たにオリンピック種目に追加され、その競技自体は従来のスポーツと異なり、ジェンダー化されていません。ユースの注目を集める競技の中で、女子選手のパフォーマンスが映し出されることは、スポーツ現場のジェンダー平等の実現の後押しになるでしょう。

一方で、パリ大会におけるトランスジェンダー女性アスリートの出場規定は東京大会と比較して厳しいものになりました。パリ大会に向けて、規定の整備が進む水泳、サイクリングでは、思春期を迎えた後に性別移行したトランスジェンダー女性は、女性カテゴリーには出場することができなくなりました。これまで不可視化されてきたトランスジェンダー女性をどのように包摂していくかといった課題に、スポーツ界は同時に取り組む必要があります。これから始まるスポーツ界の大きな変化の入り口に、私たちは今立っているのかもしれない。



### PROFILE

のぐちあや：米国大学院にてMBA取得。スウェーデンでのプロ女子サッカー選手を引退後、ザンビアのNGOにてスポーツを通じた女子教育を実践。帰国後、スポーツ庁国際課に勤務。現在、成城大学専任講師/スポーツとジェンダー平等国際研究センター副センター長。NPO法人プライドハウス東京共同代表。スポーツをプラットフォームに社会課題に取り組む(株)Azitamaを2023年に設立。